

Title	高齢者の死生観に関する研究：「死生観」と「スピリチュアリティ」と「幸福な老い」との関連を中心に
Author(s)	越智, 裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :22-27
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5291
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

高齢者の死生観に関する研究： 「死生観」と「スピリチュアリティ」と「幸福な老い」との関連を中心に

越智 裕子

1. はじめに

超高齢社会を迎える我が国は、高齢者の死亡者数が増加し、寿命の面からも死期の近い高齢者は、最後まで自分らしい人生を全うするためにも、自分自身や愛する者の死というものを日ごろから正しく理解し、予想し、準備することが重要となる。この高齢者の死の準備を支援するため、本研究では「高齢者へのデス・エデュケーションプログラム」の開発を目的に、まず、高齢者の死生観やそれに関連する要因について検討することを目的とした。

2. 高齢者の死生観研究について

死生観とは、河野、平山（2000）は「生きることの意味と生の延長上にある死について、どのようにとらえるかということについての個人の考え方」と定義づけている。高齢者の死生観研究は、河合、下仲、中里（1996）によると、1920年代の欧米で、心理学分野において始まったが、本格的な実証研究は、1960年の国際老年学会で「老人の死に対する態度」がテーマとして取り上げられるようになってからである。この当時は、死に対する否定的な態度に対する実証研究が行われてきた、しかしこの考えも、樋口（2000）は、Lifton, RやFeifel, Hの「死の否定した文化」との提言に批判が起きたこと、Kübler-Rossのがん患者の終末期医療における5段階の対処法を普及させたこと、Rayら、Gesserらが死の肯定的な態度の実証研究を行ったことで転換したとしている。これらにより、加齢にともない死を恐怖する傾向と、逆に受け入れやすくなるという2極化の考え方が示された。しかし、死生観は一朝一夕で形成されるものではなく、渥美（1992）、橋島（1992）は、たとえ科学が発展しても、死生観は特徴的に様々な宗教的思想が基になった慣習に彩られていることを主張している。その上で、金児（1997）、小池、岩脇

（2001）、浅見（2006）など宗教と主に高齢者の死の不安との関連について実証研究を行っている。

他にも、死生観との関連要因には、性別、年齢、経済状況、死別・離別・臨死体験などの影響が実証研究として挙げられている。しかし、他の世代と比較しても人生経験の豊かな高齢者の場合、杉山、方波見、中野ほか（1986）は、「幸福な老い」が「生」に関する指標を規定するための重要な要因であると重視し、小池、岩脇（2001）、中村、井上（2001）などは死生観に主観的幸福感との関連について研究している。また、高齢者は、これまでの人生のなかで幾度となく喪失、死別を経験し、自身を見つめなおし、生命の限界を感じる中で、より未知なる物への強い信頼感を抱き、超越的次元や時間次元などに自己を統合させていくような作業をしていることを考えると「スピリチュアリティ」も「幸福な老い」と同様に高齢者の「死」や「生」に関連していると考えられる。しかし、これらの実証研究の数は少なく、加え必ずしも一致した見解は得られていない。そのため、本研究では、高齢者の「死生観」に関連のあるとされ、実証研究の少ない「幸福な老い」と「スピリチュアリティ」との関連性を先行研究も踏まえながら明らかにし、高齢者がその人らしい死を迎えられるような教育的支援の可能性について検討する。

3. 研究方法

東京都内在住の403名（回収率80.6%）を対象に応募法を用いた自記式質問紙法、2週間の留め置き回収法を、2007年8月中旬～10月下旬の間で実施した。測定尺度は、表1の基本属性（性別、年齢、健康状態、孫の有無、同居形態、配偶者の状態、死別・離別経験、死別・離別期間）と表2の「死生観」「スピリチュアリティ」「幸福な老い」として「人生に対する満足度」の各因子である。

表1 基本属性

	度数 (%)		数量 (%)		数量 (%)			
性別	男性	132 (32.7)	通院回数	週1回以上	88 (24.2)	配偶者の現状	一緒に住んでいる	218 (54.0)
	女性	264 (65.3)		月1～2回	235 (58.2)		施設や病院入院	3 (0.7)
年齢	前期高齢者 (65歳～74歳)	176 (43.6)		全くない	52 (12.9)		死別	158 (39.1)
	中期高齢者 (75歳～84歳)	185 (45.8)		一人暮らし	93 (23.0)		離別	16 (3.9)
	後期高齢者 (85歳以上)	42 (10.4)	現在の居住者	夫婦2人	154 (38.1)		別居	1 (0.2)
健康	非常に健康	51 (12.6)		子どものみ同居	46 (11.4)	死別・離別経験	ある	167 (41.3)
	まあまあ健康	265 (65.6)		子とその家族と同居	76 (18.8)		ない	236 (58.7)
	あまり健康でない	59 (14.6)	孫の有無	その他	32 (7.9)		1年未満	11 (6.6)
	健康でない	19 (4.7)		ある	323 (80.0)	死別・離別期間	1年～3年未満	16 (9.6)
				ない	75 (18.6)		3年～10年未満	41 (24.6)
							10年以上	99 (59.3)

※無記入などは除外している。

表2 死生観と関連要因の因子毎の高低群

	因子順位	因子名	低群 (%)	高群 (%)
死生観	第1因子	死後の生	201 (55.1)	64 (44.9)
	第2因子	死の受容	206 (55.7)	64 (44.3)
	第3因子	死の思索	161 (42.8)	215 (57.2)
人生の満足感	第1因子	肯定的評価	160 (45.1)	195 (54.9)
	第2因子	悲観的评价	239 (74.7)	81 (25.3)
スピリチュアリティ	第1因子	自身や人生への意味や価値観	164 (52.6)	48 (47.4)
	第2因子	超越の世界への統合観	193 (53.9)	65 (46.1)

表2は、3者をカテゴリ毎に相関係数を算出し、相関行列に基づいて主因子解を抽出し、さらに斜交回転（プロマックス法）を行い、 α 係数0.45以上の因子を抽出し、その後、因子ごとの平均値を算出したものである。高いほど因子名の傾向が高く、低いほどその傾向が低いということになる。

本研究のデータ分析方法は、「死生観」「人生に対する満足度」「スピリチュアリティ」の各因子間の関係性を測定するため、相関件数を算出し、有意差が出ていた因子を、従属変数と独立変数にわけ因果関係を測定するため重回帰分析を行った。また、分析プロセスに、相関係数の影響を受けるものを参考に強制投入法を採用している。ここで

は、決定係数 (R^2) = 0.25という基準以下のものは除外している。

倫理的配慮は、インタビュー前に本研究の目的、内容を書面にて説明し、個人情報、個人記録、心身の苦痛への配慮、退出、中止への配慮など約束し、同意が得られた者と契約を交わしている。

4. 研究結果

表3は、「死生観」「人生に対する満足度」「スピリチュアリティ」の因子間の相関関係を示したものである。これら3者が相関関係にあることを明らかにしている。

表3 死生観とそれに関連する要因の相関関係

	肯定的評価	悲観的評価	自身や人生への価値や意識観	超越的世界への統合観	死後の生	死の受容	死の思索
肯定的評価	1.000	<u>-0.148**</u>	<u>0.655**</u>	<u>0.379**</u>	0.056	<u>-0.190*</u>	-0.021
悲観的評価		1.000	<u>-0.150**</u>	<u>-0.102</u>	0.007	<u>0.170**</u>	<u>0.230**</u>
自身や人生への価値や意識観			1.000	<u>0.625**</u>	<u>0.138*</u>	<u>-0.127*</u>	0.021
超越的世界への統合観				1.000	<u>0.249**</u>	-0.059	<u>0.152**</u>
死後の生					1.000	0.058	<u>0.278**</u>
死の受容						1.000	<u>0.392**</u>
死の思索							1.000

** p < .01 * p < .05

図1は、重回帰分析の結果である。「死の思索」を従属変数とした重回帰分析では、「死後の生」(t=3.259 p<0.01)、「悲観的評価」(t=3.371 p<0.01)、「超越的世界への統合観」(t=3.439 p<0.01)、「死の受容」(t=7.085 p<0.01)は、決定係数(R²)=0.254であった。

「肯定的評価」を従属変数とした回帰分析では、「自身や人生への価値や意識観」(t=14.259 p<0.01)は、決定係数(R²)=0.412であった。

「自身や人生への価値や意識観」を従属変数とした回帰分析では、「肯定的評価」(t=8.213 p<0.01)「超越的世界への統合観」(t=8.252 p<0.01)は決定係数(R²)=0.433であった。

「超越的世界への統合観」を従属変数とした重回

帰分析では、「自身や人生への価値や意識観」(t=12.651 p<0.01)、「死後の生」(t=2.980 p<0.01)、「死の思索」(t=2.191 p<0.05)は決定係数(R²)=0.409であった。

5. 考察

本研究は、「高齢者へのデス・エデュケーションプログラム」の開発を目的に、高齢者が「死」や「生」をどのように認識しているのか「死生観」への影響要因として「生」の認識の指標とされている「人生に対する満足感」と「スピリチュアリティ」を活用しながら明らかにしてきた。調査結果を踏まえ先行研究と比較しながら考察していきたい。

(1) 死生観

「死生観」の因子分析の結果、本研究の高齢者は、死を考え、死の認識を受容し、かつ、死後の生の存続などの宗教的側面で捉えている。しかし、死後の存続については、半数の者がその存在を信じておらず、これは小池ら(2001)、浅見(2006)の研究と同じであった。物質文化や科学の進展のなかで、伝統的な宗教感の薄れと、死の思想の多様化がなされていることが考えられる結果であった。

死の思想については、死後の世界の存在と死の受容が関連し、これは、死後の世界を積極的に信じている者は死を考え、肯定的に受け入れているとするSwensonの結果と同じであった。また、奥

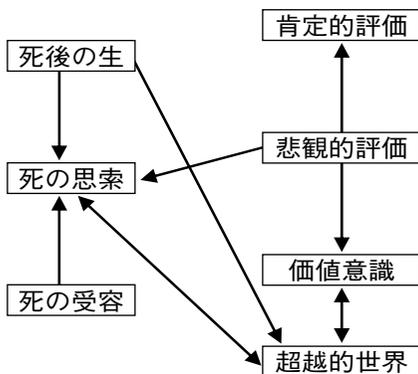


図1 死生観とそれに関連する要因の重回帰図

(1999)の高齢者を対象にした調査では、約8割の者が「死を考えている」と答えていたが、本研究では約7割の者は自分の死ではなく、近親者の死を考えていた。高齢者は身近な人の死を多く経験する年代であるため、その死を考えざるを得ないということもあり、自己消滅に繋がる自分の死をイメージすることには苦痛を生じさせることもあると考えられる。本研究の結果では、自身や親しい人の死を考える前提条件として、まず、死や病気を受け入れられることや、死後の永続的な生や魂を信じるが必要であり、その反対はほとんど見受けられない。また、死や病気を受け入れるからといって、死後の永続的な生や魂の確信へとは結びつかないという考え深い結果がでている。科学技術の発展とともに、死を終焉、帰無、未知などといったもっと多様な死の捉え方の存在や、受容にいたる前段階での死の回避性の問題などがあることが示唆され、死の概念構造をより多角的検討する必要性が理解された。

(2) 死生観と幸福な老いとスピリチュアリティの関係性

幸福な老いを現す「人生に対する満足度」の因子分析の結果、本研究の高齢者は自身の人生を悲観的・肯定的の2つの評価で認識していた。神澤、西元(2002)主観的幸福感の研究では、現在の認知的評価として、過去から未来への時間次元で評価するものと、陽性感情と陰性感情を問うものがあり、本研究では後者の考えが抽出された。また、半数以上の高齢者が人生に肯定的な評価を表明しており、これは小池(2001)の結果と同じであった。

「スピリチュアリティ」では、自分や人生への価値・意識観と超越的な世界への統合の2つの因子が抽出された。平山(1984)は、スピリチュアルの動く方向性として、(1)超越的なものとの垂直的關係、(2)人間と人間の横の關係、(3)自分自身に向かうものを述べており、本研究の高齢者も(1)と(2)の存在は認識していた。これらは、因果關係にあり、過去・現在・未来と時間軸における、自身や自身

の人生に対する意味や価値の確保されている状態は、自然や超越的なものとの接点を通し、畏敬の念を発動させるゆとりを生み、逆に、畏敬の念を感じるからこそ、自身や自身の人生に対しての意味や価値が確認できる視点の変化の可能性の捉え方が理解できるであろう。村田(2003)は終末期の病者に力を与えるものとして、超越者との「つながり」を述べており、さまざまな経験を得た高齢者においても、自己や人生を見つめ、より達観的に世界をとらえ、永続的な世界と自己というものを受け入れること、更に、この超越者との「つながり」が個人の幸福感に影響を及ぼすことについても言及している。後者は本研究とは異なる結果となっており、超越者との「つながり」よりも、寧ろ、高まった自身や人生への価値・意識観が、自身の人生を肯定的に評価することを可能とし、逆に、肯定的に評価できているからこそ、自身や人生への価値や意識が確保されていると感じていることが見受けられた。何れにしろ、高齢者が肯定的に人生を評価することにはこのスピリチュアリティの存在の重要性が認識できる結果となり、この関係性を視野に入れた検討が今後も必要であることが認識された。

また、死後の永続的な生や魂を信じることは、超越的な世界との統合観を感じることで、自身や親しい人の死を考えることへ影響を及ぼし、さらにこの統合観は死を考えることへも影響を及ぼしているため、これら3者関係は確立しているといえよう。つまり、例え、死や病気を受け入れたからと言って、直ちに超越的世界との統合観を感じるわけではなく、寧ろ、永続的な生や魂を信じることで、死を考えること、スピリチュアリティを発動させることの源となっているのではないだろうか。他方で、この統合観と死後の永続的な生や魂を信じることの繋がりは薄いため、スピリチュアリティは、死生観の部分を含む、より大きな概念であることも本研究の結果から推測された。

次に、将来への絶望感を表す人生への悲観的評

価値は、自身や親しい人の死を考えることへ影響し、その反対に、自身や身近な人の死を考えたからと言って、将来への絶望感には影響を及ぼしていないとの結果は、今後支援の方略を考える上で注目すべきところとなった。Swenson (1961) の研究時点から、すでに健康状態が不良な老人の方が、積極的に死を対処し、安定させている。この悲観的評価こそが、死の考察を可能とさせ、自己対処する過程を与えるのであろう。一方、死生観と自身や人生に対する価値・意識観との影響関係は、ここでは明らかにされていない。この自身や人生に対する価値・意識観は、「死」の側面ではなく人生への肯定的な評価との因果関係があることから、これは、死生観の「生」の要素が包含されているのではないかと示唆される。

6. 結論

上記のように、高齢者の「死生観」は「幸福な老い」と「スピリチャリティ」との因果関係があることが理解された。

高齢者が死を考えることは、自身の死や愛する者の死に関する自己決定を尊重する上でも重要なものとなる。彼らが元気なうちから自身や身近な人の死を考えるには、死や病気といったことを単に避けて通るのではなく、自身の直接的な体験や周囲の間接的な体験を通し、死や病気に関する正しい知識を身につけるための、情報提供の場が必要となる。また、自身の人生感到満足せず、死の受容ができず、それが将来への悲観的態度となっている者も存在し、高齢者の支援を考えたとき、彼らには、人生の統合を図るためにライフレビューなど用いた教育的支援が必要であらう。更に、否定的に死を捉えている者たちには、死を考えることで、限りある生をより充実させ、その人らしい生を全うさせるために、死がポジティブに捉えられる教育も必要である。例えば、本研究の高齢者も、半数以上はその死生感到宗教的慣習が薄れているが、今後死の恐怖を克服するために、個人の価値

観に沿ったスピリチュアルを含めた哲学的な教育も必要である。

これらの者が援助に繋がったとき、彼らに直接かかわる福祉従事者が彼らの死生観を理解し、かつ従事者自身が確たる死生観を持ち心理学的・医学的観点、宗教的・哲学的観点からの教育的支援(デス・エデュケーション)が行えるような知識を持つこと、また、どこで得られるのか情報提供・コーディネートが行えることが望ましく、よりその人らしい人生が全うできる援助ができることが今後重要視されるであらう。

7. 今後の課題

本研究は、都内の地域に住む比較的元素な高齢者であったため、必ずしもすべての高齢者に当てはまるという断定的な結論を導くことは困難である。今後は、多世代間の比較研究、または、同一コーホートを用いた横断的な研究など実施し、対象高齢者の幅の拡大などを行い、高齢者の死生観の概念と、その要因分析をより深めていかななくてはならない。

引用文献

- 浅見洋 (2006) 「在宅における終末期高齢者が表出した死生観とその宗教学的考察 訪問看護師への聞き取り調査を通して《特集》生命・死・医療)」「宗教研究」第80巻2号、479-504頁。
- 渥美和夫 (1992) 「特集日本人の死生観 日本人の死生観(序論)」「ターミナルケア」第2巻12号、765-766頁。
- 樋口和彦 (2000) 「死は生の中で常に成長している」「死生学がわかる」、朝日新聞社、38-41頁。
- 平山正実 (1984) 『生と死を考える』、春秋社、56-70頁。
- 神澤創、西元直美 (2002) 「主観的幸福感に関する基礎的研究—SWLSを用いて—」『関西福祉科学大学紀要』第6号、163-170頁。
- 河合千恵子、下仲順子、中里克治 (1996) 「老年期における死に対する態度」『老年社会科学』第17巻2号、107-116頁。
- 河野友信、平山正実 (2000) 『臨床死生学事典』、日本評論社、18-19頁。

- 金児暁嗣 (1997) 『日本人の宗教性 オカゲとタタリの社会心理学』、新曜社。
- 小池のぞみ、岩脇三良 (2001) 「主観的幸福感と死に対する態度との関係年齢要因を中心に」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』、41-54頁。
- 村田久行 (2003年) 「終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのアセスメントケアのための概念的枠組み」『緩和医療学』第5巻2号、61-69頁。
- 中村雅彦、井上実穂 (2001) 「死生観が心理的幸福感に及ぼす影響」『愛媛大学教育学部紀要』第47巻2号、59-99頁。
- 櫛島次郎 (1992) 「特集日本人の死生観 通過儀礼からみた死生観—伝統・現状・将来—」『ターミナルケア』第2巻12号、767-773頁。
- 奥祥子 (1999) 「高齢者の生と死に関する意識」『鹿児島大学医療技術短期大学部紀要』第91号、1-5頁。
- 杉山善朗、方波見康雄、中野治ほか (1986) 「高齢者の生き方の質《quality of life》と『死生観』の関連性についての研究」『社会老年学』通号24、52-66頁。
- Swenson, W.M., (1961) 「Attitudes toward death in an aged population」『Journal of Gerontology』 Vol.16, pp.49-52.

(おち・ゆうこ 聖学院大学大学院アメリカヨーロッパ文化学博士後期課程)